

# チャールズ・テイラーの人間存在論

飯 塚 智

リベラル コミュニタリアン論争は「すれ違い (Cross-Purposes)」<sup>1)</sup>であった。当の論争においてコミュニタリアンの側の一角を占めたチャールズ・テイラー (1931-) によって呈された、これは苦言である。この論争において、コミュニタリアンの関心は、それぞれの立場の基盤となる人間観・存在論的な論点 (ontological issues) に向けられていたにも係わらず、実際に交わされた論争の大半は、特定の社会体制の擁護という論点 (advocacy issues) に関するものでしかなかった。この二つの論点は、もちろん無関係ではない。ただし、別個の論点であることも疑いない。議論の前提とも言うべき存在論的な論点をないがしろにしてしまったために、両陣営の議論はうまく噛み合わず、結果として「すれ違い」になってしまったのである。

この批判は極めて重要である。一般的に理解されているリベラリズムとコミュニタリアニズムの対立構造は、少なくともテイラーにとっては本質的な問題が欠落した形で描かれた構図だということになる。政治哲学の領野におけるテイラーの (コミュニタリアンの) 議論を正確に捉えるためには、その人間存在論を検証することが必要条件となる。

実は筆者自身が、テイラーの思想に関心を持って以来、彼の政治哲学についての議論ばかりを追いかけて、「哲学的人間学 (philosophical anthropology)」と称する彼の人間存在論には殆ど目を向けなかったという前科を持つ。その反省を踏まえ、また同時に、テイラーの政治哲学の基盤を理解するための試みとして、本稿ではテイラーの人間存在論の中核を占める三つの概念を検証し、そ

こからテイラーの考える人間の在り方、抜きがたい道徳性と社会性を有する人間の在り方を描き出すことを目指すものとする。そしてこの作業によって、政治哲学におけるテイラーの主張をより明確な形で理解することが可能になるだろう。

## 1. 強い評価 (strong evaluation)

「強い評価」という概念は、テイラーの人間学において中心的な役割を果たす概念である。他の存在者と比較した場合に際だって人間的であると言える特徴を求めて、テイラーはまずハリー・フランクファートの「第二階の欲求 (Second-order Desires)」についての考察<sup>(2)</sup>を参照することからその論証を始める。テイラーの「強い評価」そのものを検証する前に、フランクファートの主張を簡単に見ておくことにしよう。

フランクファートは動物一般が有する欲求を「第一階の欲求 (First-order Desires)」と呼ぶ。具体的な例としては食欲、性欲、睡眠欲等に代表される生理的な欲求が挙げられるだろう。だが、人間は動物と異なり、更に「欲求についての欲求」とでも言うべき「第二階の欲求」をも有している。フランクファートはこの第二階の欲求を有するのは人間だけであると考え、この欲求の有無を、動物と人間を分かつ大きな基準となると考えた。

テイラーはこのフランクファートの主張を基本的に引き継ぐ。則ち、「欲求を評価する能力、つまり、ある欲求を望ましいものとみなし、他の欲求を望ましいものでないと見なす能力<sup>(3)</sup>」を、人間に備わった本質的な能力であると考え。ただしテイラーは、そこから更に一步を進め、この能力を二分する。それが「強い評価」と「弱い評価」の区別である。

この両者を区別する基準となるのは、その評価が、価値の質的な区別に係わるものであるか否か、ということである。ここで言う「価値の質的な区別」とは、ある行為や感情や生の様式について、「高潔な / 非道な、誇らしい / 恥ずかしい、深遠な / 軽薄な、高貴な / 卑俗な」等々の対照的な言語によって示さ

れる、比較対照的 (contrastive) で位階的 (hierarchical) な区別である<sup>(4)</sup>。テイラーはこうした区別が含まれる評価を「強い評価」と呼び、これらが含まれていないものを「弱い評価」と呼ぶ。

もっとも、弱い評価もある意味では質的な区別を行っていると言えるだろう。例えば、休暇を山で過ごすか海で過ごすか、といった選択の場合である。こうした類の選択もまた、選択肢となる事物や行為の質を判断し区別するものではある。

では、強い評価と弱い評価の決定的な相違は如何なる点に存するのか。それは、評価の対象となる選択肢が有する価値の両立不可能性 (incompatibility) である。弱い評価においては、選択肢は必ずしも両立不可能ではない。上で挙げた例に即して言えば、海と山が隣接した保養地があったとすれば、海と山という二つの選択肢の一方を評価に基づいて選択する必要はなくなる。弱い評価においては、選択肢の両立不可能性はあくまで偶然的なものなのである。それ故、選択の理由もその時々気分や嗜好に左右されやすい。

それに対して強い評価の場合には、選択肢の両立不可能性は必然的・絶対的なものである。例えば、戦場で恐怖に怯える兵士が敵前逃亡の誘惑に駆られながら、それを臆病な行為として退ける場合。この場合の「逃亡すること = 臆病な行為」という評価の対極には、「敵に立ち向かうこと = 勇敢な行為」という評価が位置することになる。そしてこの「臆病 / 勇敢」という評価の質は (そして先に挙げた幾つかの例も)、決定的に両立不可能なものなのである。

こうしたケースの場合、いずれの選択肢を選ぶかという問題は、自らの生の在り方にまで係わる問題となる。テイラーがこうした評価を「強い評価」と称する理由の一つは、そうした評価が自己 (self) の生の在り方と密接不可分な形で関連しており、その在り方を示すものであるという点に存する。

更にテイラーは「弱い評価」「強い評価」という区別に対応する二つの評価者の在り方を呈示し、それぞれを「単なる比較考量者 (simple weigher)」, 「強い評価者 (strong evaluator)」と呼ぶ。単なる比較考量者の場合、その比

較考量は単に、選択肢となる対象が自らにはたらきかける力の量についてのものである。つまり、それが自らの生に対して如何なる意味を持つのかという点に関しては、明確な形で認識することはできない。それに対して強い評価者の場合には、対象の選択は自らの生に質的に係わる問題として見なされる。この点が、両者を分かつ決定的なポイントである。

強い評価者においては、いずれの選択肢を選ぶかという評価の問題は、選択を行う当の人間の生の在り方と不可分な関係を有することになる。つまり、そこで下される評価は「われわれの嗜好についての分節の条件であるのみならず、われわれの生の質 (quality of life) についての、つまりわれわれが如何なる存在であるか、如何なる存在でありたいかという問題についての分節の条件」でもあるのだ<sup>(5)</sup>。

この「強い評価」は、それ自体がテイラーの道徳的な哲学的態度を顕著に示す概念である。解釈学における理解 (Verstehen) と説明 (Erklärung) の対立構造に即して言えば、テイラーはこの対立を全面的に容認していると言えよう。

それ故、例えば、自然主義的な態度に対するテイラーの批判は厳しさを極める。ここでの自然主義とは、人間は自然の一部であり、それ故、自然を対象とした探求の方法は人間を対象とした探求の方法に転用可能であり、また転用すべきであるとする立場のことである。こうした態度を採る自然主義者たちは、例えば後述するフレームワークについての、或いは意味についての議論に対して疑問の目を向け、時にはそうした問題を疑似問題として等閑に付し、無意味なものとしてあっさり切り捨ててしまう<sup>(6)</sup>。テイラーはこうした態度を強く非難する。そしてその際、テイラーはしばしばこの「強い評価」という人間特有の能力を強調している。

## 2. 道徳的フレームワーク

強い評価はわれわれの生の在り方を示す。如何なる行為を高貴であると（卑俗であると）、或いは誇らしいと（恥ずかしいと）見なすのか。その評価の仕方によって、同時に、評価を下す人間の生の在り方が示されることになる。では、われわれがこれらの強い評価を下すとき、その評価の基盤となるものは何であるのか。それは、テイラーが言うところの「フレームワーク（framework）」である。われわれは、自らがその内に在るところの、そしてそれに依って立つところのフレームワークに従って、強い評価を下すのである<sup>(7)</sup>。

フレームワークという言葉をもとに具体的に説明するならば、それは、ある人間の価値観や道徳観に全体的な形姿や傾向を与えるところの、一連の信念である、と言えるだろう。それ故、フレームワークは常に道徳的な性格を有する。人間はこのフレームワークから逃れることはできない（inescapable）。むしろ、そうした道徳的なフレームワークを有すること、そしてその内部で生きることは、人間にとって「構成的（constitutive）」なことであり、そのフレームワークを外へと踏み越えることは、テイラーに言わせれば、人間が人間でなくなるということなのである<sup>(8)</sup>。

このフレームワークについて考察するために、テイラーはアイデンティティの問題に焦点を合わせる。アイデンティティの問題は、端的には「私は誰？（Who am I?）」という問いで示されるだろう。テイラーによれば、私が誰かを知るということは、私がどこに立っているか（Where I stand）を知ることである。そして、私が自分が立っている位置を知るのには、上述したフレームワークの中においてなのである。

自分が立っている位置を知るとはどういうことだろうか。通常、「あなたは誰ですか」と問われた場合には、われわれは様々な形で自分がどういった人間なのかを説明するだろう。名前、年齢、性別、社会的身分、出身地や出身校、などなど。これらはある意味で位置付けと言えなくもない。こうした自己の同

定は、社会の中において自らがどのような位置を占めているかについての説明だからである。だが、テイラーの言う位置とは、こうしたことに留まるものではない。彼によれば、われわれのアイデンティティは、ある定位と密接にかかわっているのである。その定位とは、「道德の空間 (moral space)」の内部における定位である<sup>(9)</sup>。

「道德の空間」を、テイラーはまた「問いの空間 (space of questions)」という言葉に置き換える。テイラーの考える問いとは如何なる問いか。それは、何が善であり何が悪であるか、何が行うに値し何がそうでないか、己にとって何が重要なことであり何がどうでもよいことなのか、こうした道德的な問いである。則ち、道德の空間における定位とは、道德的な問い、とりわけ善についての問いに対して人間が採る態度、応答のことなのであり、そこで採られる態度や応答は、われわれのアイデンティティにとって必要不可欠な構成要素と考えられるのである。

テイラーの人間観における決定的な特徴が、ここにある。それは、こうした問いの空間は独白的 (monological) なものではなく、対話的 (dialogical) なものだということである。テイラーは科学的学問の対象と人間存在 (自己, self) との相違について言及するが、その際に両者の相違点の一つとして「それを取り巻くものへの言及」<sup>(9)</sup>を挙げている。科学的学問の対象は、原理的に、それを取り巻くもの、つまり周囲の事物への言及なしに記述されうる。だが、自己はそうではない。テイラーによれば、ある者が自己であるのは、他の自己 (other selves) の間であってのみなのである。自己は、それを取り巻く他の自己への言及なしには、決して記述されえない。このことは、問いの空間が対話的、つまり「自己と他の自己とが問いかけ応答し合う」<sup>(11)</sup>空間であることを示唆している。道德の空間とは、複数の自己が対話を交わし、互いに問いを投げかけ、答えを返すという、社会的な性格を有する空間なのである。

上述したフレームワークの道德的性格は、ここでより明確な形で示すことが

できるだろう。われわれが道徳的な問いに対してある態度を採るとき、まさにその態度の基盤となるのが道徳的フレームワークなのである。道徳的フレームワークは、われわれを道徳の空間へと向かわせしめ、そこにおいてある態度を採らせしめるものである。そしてこのフレームワークは更に、われわれの生の在り方についての態度をわれわれに与えるものでもある。ただの生 (mere life) ではなく、良き生 (good life, living well) への定位、われわれを人間の全き生へと導くものへの定位。それぞれのフレームワークに基づいて、われわれは「如何に生きるべきか」という問いに対する答えを呈示するのである<sup>(12)</sup>。

前章で述べた強い評価についても、ここで付言しておこう。テイラーは強い評価について、それは「道徳についての思考 (moral thinking) の中心を占めるものであり、そこから取り除くことはできない」ものだと述べている<sup>(13)</sup>。つまり、道徳の空間におけるわれわれの定位において中心的な役割を占めるのが、われわれが道徳的な選択において下す判断、則ち強い評価であると言えるのだ。

さて、道徳的フレームワークの中では、様々な善がその質に応じて評価される。そして、強く価値付けされた善の中でも際だって強い価値を付与されるものを、テイラーは「究極的な善 (hypergoods)」と呼ぶ。この究極的な善は、道徳的フレームワークの中で、他の強く価値付けられた善を考量し、判断し、その位階を定める基準としての役割を担う。そして「究極的な善というパースペクティブのようなものを欠いては、われわれはわれわれの道徳的な生を理解することはできない」<sup>(14)</sup>と述べられていることからして、究極的な善は、われわれの生において教導的な役割を果たすものと考えられる<sup>(15)</sup>。

### 3. アイデンティティ・物語 (Narrative)・時間

「人間存在とは、自己解釈を行う主体である」<sup>(16)</sup>。この言葉は、テイラーの人間観を端的に示す言葉である。自己解釈 (self-interpretation) について、テイラーは多くの箇所、様々な文脈に即して言及する。その主張を要約すれ

ば、「自己のアイデンティティを確立するために、当の自己が有する、自己自身についての理解が必要とされる」ということになる。

そしてテイラーは、この自己解釈について新たな説明を加える。われわれの生について理解を有すること、則ちアイデンティティを有することの条件として、善に対する定位が挙げられることは先に述べた。そしてこの善に対する定位、善についての理解は、開かれたストーリー（an unfolding story）としてのわれわれの生の理解に編み込まれている、とテイラーは述べる。そして、われわれ自身を理解するための、新たな基礎的条件を提示する。それが、「われわれは自分自身の生を物語の内において把握する」という条件である<sup>(17)</sup>。

物語という概念の内実を理解するために、テイラーの説明をいま少し引いてみよう。「われわれが誰であるのかを理解するためには……われわれが如何にしてわれわれとなったのかについての、そしてわれわれがどこに向かうのかについての考えを有していなければならない」。現在のわれわれのアイデンティティは、現在の自分についての理解のみによっては獲得されない。いや、正確に言うならば、現在の自分についての理解は、必然的に、過去の自分についての理解と、そして未来の自分についての理解と、不可分に結びついているのだ。

テイラーはここでハイデッガーの時間性についての議論を参照し、世界の内に在るという事実が有する時間構造について言及する。その時間構造とは「われわれがわれわれになった、ということの理解に基づき、現在の諸可能性の領域の中で、自分自身を未来へと企投する」という、過去（Gewesenheit）- 現在（Gegenwart）- 未来（Zukunft）の三つのアスペクトを持つ時間構造である<sup>(18)</sup>。

われわれの自己理解・自己解釈は、不可避免的に時間の中で行われざるをえない。だが、われわれは時間の中で固定されているわけではない。時間が経過する中で、われわれの自己理解や善についての理解が変質する可能性もある。そのため、われわれが自己についてより精確に理解しようとするなら、この時間という要素、つまり 過去 - 現在 - 未来 という時間の三つのアスペクトを、



何らかの形で総合しなければならない。そして、このような時間の総合において媒介の役割を果たすのが、他ならぬ物語である。

われわれは物語の中で自己を理解することによってアイデンティティを獲得する。その際、物語によって総合された自己理解は、今現在の自己についての理解であるのみならず、「われわれが如何にしてわれわれとなったのか」についての理解（過去の自己についての理解）、そして「われわれがどこに向かうのか」についての理解（未来の自己についての理解）を含むものである。時間の三つのアスペクトにおけるそれぞれの自己についての理解は物語の中で統合され、われわれは統一的な自己理解を、ひいてはアイデンティティを、獲得することになるのである。

#### 4. テイラーの描く人間像

テイラーのリベラリズム批判を代表する著作としてしばしば言及されるのが「アトミズム」という論文である。本稿のまとめとしてテイラーの人間観を描き出すにあたり、まず「アトミズム」において展開されたテイラーの主張を概観しておこう。

テイラーは、リベラリストたち（R. ノージック、J. ロールズら）の個人主義的な人間観を、アトミスティックなものとして批判する。その際テイラーは、このアトミズムという見解を、アリストテレスの「社会的動物としての人間」という考え方と対置することによって定式化しようと試みる。それによればアトミズムとは、「人間がただ一人で、個人で自足（self-sufficient）可能であることを肯定する見解」<sup>19)</sup>である。人間が社会の一員として担う義務よりも、個々の人間が有する権利が優先している、というホブズやロックの考え、そしてそれを継承したノージックらの人間観は、こうしたアトミスティックな人間観を背景としている。

だが、リベラリストが最も重要視する「選択の自由」という個人の権利を可能にする「自由な選択の能力」は、ただ一人の人間によって獲得されることは

決してない。テイラーによれば、真に自由な選択とは、自らが何を選択すべきかを理解していなければなされないことである。そして、自らが何を選択すべきかを理解するという自律的な能力は、文化全体の中でしか開花することはない。

自律的であるとは如何なることなのか。それを知ることが、テイラーによれば、則ちアイデンティティの形成である。アイデンティティとは生得的なものではなく、後天的に獲得されるものであり、その獲得は文化の中でしか、ひいては社会の中でしかなされ得ない。更に言うなら、「アイデンティティは、常に、他者との会話において、或いは社会の実践の根底に存する共通理解を通じて、部分的に規定されている」<sup>20</sup>のだ。

こうした議論が、テイラーのリベラリズム批判の要旨である。リベラリストが支持する、個人の権利を核とした人間の在り方も、あくまで社会を前提にしたものであり、こうした人間の社会性を見落としている、或いは無視している点が、リベラリズムの決定的な過ちである、そのようにテイラーは主張する。

「アトミズム」において示された議論は、最早政治哲学の枠に留まらない。テイラー自身が「アトミズム」の中で述べているように、それは人間の条件を問う議論であり、人間の本性に係わる問題である。本稿の冒頭で言及したテイラーの指摘、リベラル - コミュニタリアン論争に欠けていた存在論的な論点とは、まさにこのことを指している。

そして「アトミズム」に代表されるテイラーの政治哲学の議論を支えるのが、本稿の主題である彼の人間観、則ち存在論的な思想である。最後に、これまで述べてきたテイラーの人間存在論の三つの概念を統合して一つの間人像を呈示し、テイラーの考える人間の在り方を素描することで、本稿のまとめとしたい。

われわれはそれぞれの「フレームワーク」に支えられて「道徳の空間」へと立ち入り、他の自己との対話や応答という社会的な営みを通じて、自らのアイデンティティを形成してゆく。また同時に、そのアイデンティティは、「物語」

という統一的な視座の下で自己理解を通時的にまとめ上げ、収斂させてゆくことで、更に確固たるものとなってゆく。そして、われわれのアイデンティティが如何なるものであるのか、われわれが如何なる存在であり、如何なる存在でありたいかを端的に示すのが、われわれが下す「強い評価」なのである。

こうした道徳的・社会的な人間存在の在り方は、他者との共生や社会倫理という現代の一大トピックを考えるにあたって、一つの大きな指針となってくれるだろう。そしてテイラーの議論を真に踏まえるならば、そうした問題に対してアプローチを進めてゆくわれわれ自身の人間としての在り方を、われわれは常に問い続けなければならない。テイラーが呈示した人間の在り方は、最終的な正しい解答では、決してない。だがそれ故に、テイラー自身の主張そのものが、われわれに対する問いかけでもあるのだ。われわれは既に、テイラーと共に、「問いの空間」の中に立っているのである。

#### 注

- (1) Taylor, C 'Cross-Purposes: The Liberal-Communitarian Debate' " Philosophical Arguments " Harvard University Press, 1995, P 181-203
- (2) Frankfurt, H 'Freedom of the Will and the Concept of the Person' Journal of Philosophy 68-1, 1971, P 5-20
- (3) Taylor, C " Human Agency and Language: Philosophical Papers 1 " Cambridge University Press, 1985, P 16 (以下, HAL と略記)
- (4) Abbey, R " Charles Taylor " Princeton University Press, 2000, P 17
- (5) HAL, P 23-26
- (6) " Sources of the Self: The Making of the Modern Identity " Harvard University Press, 1989, P 19 (以下, SS と略記)
- (7) Abbey, R " Charles Taylor " P 35 cf. SS 1, P 39
- (8) SS, P 27
- (9) *ibid.*, P 27-28
- (10) *ibid.*, P 33-35
- (11) 田中智彦「アイデンティティの現象学 - チャールズ・テイラーにおける個人主義の基礎 - 」『早稲田政治公法研究』第50号収載, 1995年, 223頁 - 224頁 田中は、本論で言及することのできなかったテイラーの言語観を参照しながら「道徳の空間」を解釈している。

- (12) Smith, N. H “ Charles Taylor: Meaning, Morals and Modernity ” Polity Press, 2002, P 92
- (13) Taylor, C “ Philosophy and the Human Sciences: Philosophical Papers 2 ” Cambridge University Press, 1985, P 234 (以下, PHS と略記)
- (14) SS, P 71
- (15) ただし, 全ての道徳的なフレームワークが究極的な善を内包するか否かについては, テイラーの記述が不分明なこともあり, 研究者の間で解釈が分かれている。  
cf. Abbey, R “ Charles Taylor ” P 35-37
- (16) HAL, P 4
- (17) SS, P 47 強調は引用者によるもの。
- (18) Heidegger, M “ Sein und Zeit ” Max Niemeyer Verlag, 1993, S 328-329
- (19) PHS, P 189 なお, 当該論文の翻訳である「アトミズム」(田中智彦訳, 『現代思想』, 青土社, 1994年4月号掲載)を参考にしたが, 訳文は適宜変更している。
- (20) ibid., P 209

大学院文学研究科研究員